陳舜臣さんを語る会通信

NO.61　Mar.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年3月15日

『阿片戦争』に並ぶ中国歴史小説の大作『秘本三国志』

「三国志」といえば吉川英治『三国志』が有名です。本号では、陳舜臣『秘本三国志』をとりあげました。

1961年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞し作家デビュー、次々、推理小説を書いていた陳舜臣さんが、いきなり、書き下ろしで、三千枚におよぶ本格的な中国歴史物『阿片戦争』を講談社から上梓したのは1967年のことでした。その後も、日本推理作家協会賞を受賞した『玉嶺よふたたび』『孔雀の道』ほか、推理小説中心の執筆が続きます。そして70年代中頃、「オール讀物」に『秘本三国志』(1974-77)、「サンデー毎日」に『小説十八史略』(1974-77、81-83)が連載されました。

ところで、陳舜臣さんの長編小説上位4作品は次のとおりです。頁数は、上下２段組の『陳舜臣中国ライブラリー』(集英社)を基準にしています。①『小説十八史略』1753頁　②『阿片戦争』1207頁　③『秘本三国志』929頁　④『チンギス・ハーンの一族』(朝日新聞 1995-97) 887頁。　　(編集委員　橘雄三)

文春文庫版表紙

文藝春秋社版『秘本三国志』「あとがき」より抜粋・転載
傍線は編集委員の加筆

物語になる時代は、なんといっても乱世であろう。そこには戦闘があり、謀略があり、さまざまな起伏、興亡がある。(中略)

黄河の中流におこった中国の文明圏が、しだいに拡大し、ついには周王朝の統制力が及ばなくなり、各地に実力者が併立したのが春秋戦国時代である。紀元前二二一年に、秦の始皇帝がそれを統一し、漢がそれをうけついだ。そして前後四百年の統一時代のあと、後漢末、すなわち二世紀末ごろからよようやく分裂しはじめる。途中で晋の一時的な統一はあったが、この分裂時代は隋の統一までほぼ四百年つづいた。三国志の物語はこの分裂初期を舞台とする。

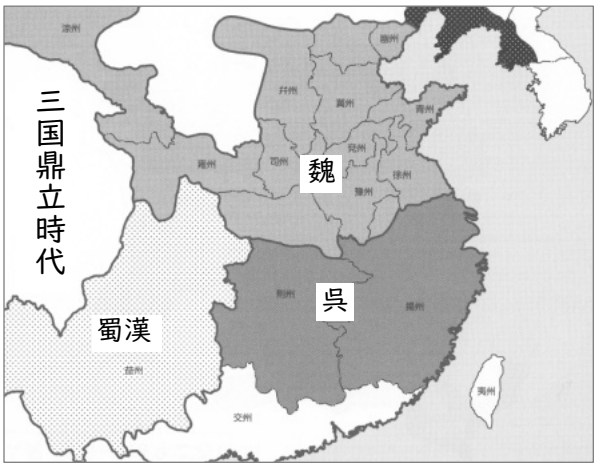
乱世の人たちは切歯扼腕(せっしやくわん)し、和平統一への願望の炎を燃えあがらせた。

そのすさまじい熱によって、三国時代の物語が中国人の胸に焼きつけられた。いつの時代でも三国志物語が引用され、その時代のうえに重ねられたものである。二十世紀の現代でも、三国志のエピソードは現実を説明するためにしばしば引用されている。誰もがそれを知っているからなのだ。

正史の三国志を物語化した「三国志演義」は、あまりにも普及しすぎて、たんに三国志という場合、むしろこちらを指すのがふつうになったほどだ。作者は十四世紀の羅貫中(らかんちゅう)である。彼は十四世紀人の目で、千年以上もまえの歴史を物語化した。学究の分析によれば、彼が用いたのは正史の「三国志」「後漢書」「資治通鑑」の三種で、それに巷説と自分の創作をまじえたのだという。

私はいま二十世紀の後半を生きる人間の目で、千七百年ほどまえの時代を書こうとしたのである。羅貫中の原文はだいぶまえに読んだが、本書執筆にあたっては、わざと読み返すことを避けた。とうぜん記憶にのこっている部分はあるが、できるだけそれから離れようとしたのだ。

ともあれおなじ根本史料を、私は自己流に読み自己流に解釈し、そして推理をまじえて物語をつくった。これはあくまでも「私の三国志物語」である。題の「秘本三国志」は、オール讀物に連載するにあたって、編集部が考えてくれた。「秘」の字にあまりこだわることはない。このタイトルは、作品の出来の良し悪しは別として、陳舜臣にしか書けない三国志物語、というほどの意味にとっていただきたい。



この秘本三国志を執筆する直前に一度、そして連載中に二度、私はそれぞれ一カ月ほど中国を旅行した。三国志物語の舞台を、この目でたしかめ、この足で歩いたことは、私には生涯忘れられない思い出である。最終回の最後のピリオドを打ったあとも、私は余韻にしてははげしすぎるものが、胸中に鳴りつづけるのをかんじた。

一九七七年五月
六甲山房にて　　陳舜臣

『秘本三国志』主な登場人物　講談社『陳舜臣全集4、5巻』参照

●少容（しょうよう）　道教五斗米道の教母。いくつになっても変らぬ美貌の主で、話相手の心をなごませる話術家でもある。後漢末から興隆する道教の巨大組織を背景に、曹操、劉備、孫権らの英雄に大きな影響を与える

●陳潜（ちんせん）　棄児されていたのを少容に育てられ、彼女の手足となって各地を歩き、情報を蒐集する

●張魯（ちょうろ）　少容の息子で、巴蜀（四川省）に盛んであった五斗米道の主宰者。のちに漢中に信者を中心にした支配圏をもつ

■黄巾の乱　一八四年、後漢の霊帝の時、張角を首領として河北に起った農民反乱。張角らはことごとく黄巾を着け、黄老の道を奉じて太平道と称し、貧民を救済したので、たちまち強大となり、蜂起した。同年末、張角の病死によって衰えたが、その後も残党の反乱は続き、後漢滅亡の契機となった

●辯（べん）　霊帝の長子。十四歳のとき父親に死なれ皇帝になるが、董卓に毒殺される

●協（きょう）　辯の弟、後漢最後の献帝。董卓に擁立され皇帝になるが、各地に割拠する群雄はこれに従わず、天下は乱れに乱れ、三国志の時代となる。二二〇年、曹操の子、曹丕に帝位を禅譲し、漢は亡びる

●支英（しえい）　洛陽郊外にある月氏族の信仰の対象である浮屠（仏教）の寺（白馬寺）にいる西域人のリーダー

●景妹（けいめい）　絶世の美女。支英の養女で秘書役。病気で長く養生している

●支敬（しけい）　白馬寺の僧侶。支英の後継者

●曹操（そうそう）　字は孟徳。祖父曹騰は宦官の最高位である大長秋（大奥の宰相）にまでなり巨万の富を築くが、孫の曹操にまで「宦官の家の子」と陰口はついてまわる。許子将に「治世の能臣、乱世の姦雄」と評せられたが、淫祀邪教を徹底して排したり、敵対した人間でも才能ありとみれば重用するなどの合理主義者。三国（魏・蜀漢・呉）で最大の魏を建国。詩人

●曹丕（そうひ）　曹操の長男。後漢の献帝から帝位を譲り受け、魏の初代皇帝となる

●曹植（そうしょく）　曹操の三男。父は詩文の才にとむ三男を後継者にすべきかどうか悩んだ。兄嫁に想いをよせ、兄が帝位に即くことになってからは淋しい生活をおくる

●董卓（とうたく）　三国時代の幕を開けた一世の梟雄。霊帝没後、宦官誅滅を策した大将軍何進に洛陽に呼ばれたのを機に蛮行を重ねた。混乱のなか、労せずして辯と協の兄弟を手に入れ、洛陽の主となり、恐怖政治をしく。義理の息子の呂布に殺される

●袁紹（えんしょう）　曹操とは幼馴染み。四代にわたり官僚の最高位・宰相を出した名門の出。公正で侠気に富み、面倒見がよく、反董卓連合の盟主となる。官渡の戦いで曹操に敗れ、舞台から消える

●袁術（えんじゅつ）　袁紹の従弟。従兄を「メカケの子」と軽侮、二人は犬猿の仲。名門の出を鼻にかけ、「帝位につく」色気をみせるが自滅

●呂布（りょふ）　洛陽の警視総監（執金吾）の片腕だったが、あるじの首を土産に董卓の義理の息子になる。ところが義父の女・貂蟬と密通し、義父を殺し、各地をさすらい、最後は曹操に討たれる

●貂蟬（ちょうせん）　董卓の女であったが呂布が奪い、更に関羽が奪う

●劉備（りゅうび）　字は玄徳。公孫瓚、呂布、曹操、袁紹のもとで耐えに耐え、荊州の劉表の客将のとき、諸葛孔明にめぐりあい、「三顧の礼」で迎え、最後には蜀漢を建てる

●関羽（かんう）　字は雲長。劉備と義兄弟。猛将。軍神として関帝廟に祀られている

●張飛（ちょうひ）　字は翼徳。劉備を助けた勇将。部下に過酷であったため、張達らに暗殺される

●孫堅（そんけん）　陣中に巫女の風姫をおき、その神託を使って軍を動かす。「伝国璽」を手に入れ、天運がまわってきたと信じたが、流れ矢で戦死

●孫策（そんさく）　孫堅の長男。勇猛で「小覇王」とよばれたが、かつて絞殺した許貢の息子らに殺される

●孫権（そんけん）　孫策の弟。「碧眼児」と呼ばれる。十九歳で孫家軍団の頭領となり、赤壁の役で曹操を敗走させ、ついに呉の初代皇帝となる

●周瑜（しゅうゆ）　十五歳で孫堅の側近。孫堅に「孫家軍団はこの少年に奪われるかもしれない」と心配させた俊英。赤壁の役で大功をあげた孫権陣営の重鎮

●諸葛孔明（しょかつこうめい）　名は亮。天下太平のためには国の統一が必要だが、いま、その器量の人物がいないとして天下三分を説く。劉備の名参謀となり、蜀漢建国に導く

●司馬懿（しばい）　字は仲達。曹操の参謀。諸葛孔明との五丈原での戦いは有名。孫の司馬炎が晋を興す基礎を築く

小川環樹ほか訳『完訳三国志』（一九八三 岩波書店）挿画より
右上、午睡から醒めた孔明。左手、丁重に挨拶しているのが玄徳

『秘本三国志』いくつかの補足

補足(1) ■ 登場人物 少容のこと

陳舜臣さんは各章末に、「作者曰く」という一ページほどの文章を置いています。最初の章、「黄天立つべし」では、この箇所、「少容」についての記述です。引用します。頁数は『陳舜臣中国ライブラリー』によります。

作者曰く。ー
中国の史書に登場する女性は、何某の娘、何某の妻と記されるだけで、名前の不明なケースが多い。
五斗米道の張衡の妻についても、「張魯の母」とあるだけで、名をのせていない。ここに「少容」としたのは、作者がつけた名である。
三国志の『蜀書』に、彼女のことを、
ー又た少容有り。
と述べているところから、それを名前に採った。
少容とは、「若い容貌」のことである。年のわりに、若くみえたのだ。
『後漢書』には、
ー沛人張魯、母は姿色あり。
とある。よほど容姿がうつくしかったのであろう。(中略)
三国志は異能、奇才の人物によって彩られているが、張魯の母をそのなかに入れないのは、これまでの物語作家の不明というべきではなかろうか。(13巻 p.34)

陳さんは、五斗米道の教母少容とその養い子・陳潜を狂言回しとし、大きな役割を与えています。強い思い入れを感じます。

補足(2) ■ 曹操の父親を殺したのは趙雲?

一九三年、徐州の牧・陶謙の部将が、琅邪から兗州へむかう曹操の父親一行を襲い、父、弟ほか、供のものを惨殺、財を奪うという事件が起きます。この箇所、小川環樹ほか訳『完訳三国志』(一九八三 岩波書店)から抜粋・転載します。

太守陶謙は、曹操の父親が通り過ぎるのを知るや、州の境まで出迎えて、うやうやしくあいさつし、宴会をもよおし、二日間もてなした。曹嵩が発とうとすると、陶謙はわざわざ城外まで見送りに出、とくに都尉張闓に命じ、五百の兵をひきいて護衛させた。

つまり、この事件の「首謀者は張闓」です。吉川英治『三国志』もそうなっています。

ところが、『秘本三国志』では、なんと、曹操の父親を殺した首謀者は、劉備の家来・趙雲なのです。『秘本三国志』から抜粋・転載します。

はげしい雨の音が、趙雲の指揮する壮士隊の奇襲を、計画以上に見事に成功させたといってよい。
警固の武士は、散り散りになって、しかもほとんど裸であった。趙雲側の壮士は、裸の男をつぎつぎに斬りすてた。
「残しておくのだぞ。みんな殺してはならぬ。わしの言ったとおりにせよ!」
趙雲は部下にそう念を押した。
徐州刺史陶謙の部下と名乗りをあげたのだ。それを聞いた者を、ぜんぶ殺してはならない。曹操へそのことを、報告に帰る者を残しておかねばならない。(13巻 p.327)
(中略)
ー兵力さえあれば。
これが劉備とそのよき副官関羽の、歎きのことばであった。
曹操のように、三十万の青州兵を擁している陣営など、劉備からみれば、腹が立ってならないほどのぜいたくだ。だから、戦争の種をまいて、その力を削ってやろうとしたのである。
(13巻 p.337)

陳舜臣さんには、三国志に題材をとった小説として、単行本発行順で、『秘本三国志』(文藝春秋社 1974)、『諸葛孔明』(中央公論社 1991)、『曹操ー魏の曹一族』(中央公論社 1998)があります。

ところが、上述の箇所、『秘本三国志』から二十数年経った『曹操ー魏の曹一族』「父の死」の章では、この事件の首謀者を張闓とし、趙雲の名は一切、出てきません。首謀者趙雲説の無理を自覚されたのかも知れません。

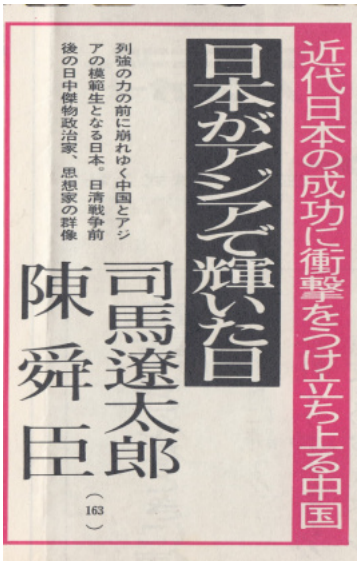
故郷の趙雲廟(石家荘市)の前に立つ趙雲像
(大修館書店『三国志演義事典』より)

『オール讀物』に38回連載『秘本三国志』

「秘本三国志」は『オール讀物』に1974年1月から77年3月まで連載されました。初刊本は『秘本三国志(1)～(6)』(文藝春秋社 1974.12-77.6)で、38の章からなっています。連載期間は39ヵ月なので、一回休みがあったのでしょう。『オール讀物』の昭和50年新春特大号(定価350円、購入価格は1000+送料310円)を入手したので、ここに紹介します。下に引用した『秘本三国志』の頁数は『陳舜臣中国ライブラリー』による。

『オール讀物』昭和50年新春特大号表紙

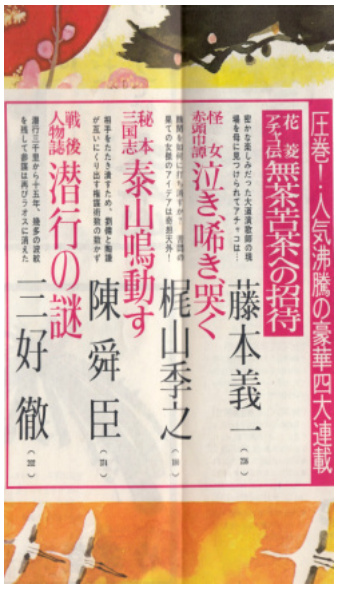
表紙に、「＊新春歴史対談＊ 阿片戦争以後」と題し、、司馬遼太郎・陳舜臣両氏の対談が大きく取り上げられています。



掲載頁をのぞくと、『日本がアジアで輝いた日』というタイトルで、「阿片戦争以後、列強の侵略の前に崩れゆく中国と明治維新で近代国家への脱皮をはかる日本。このアジアの明暗を人物中心に語り合う」とコメントされています。

機会を見つけて紹介したいと思います。

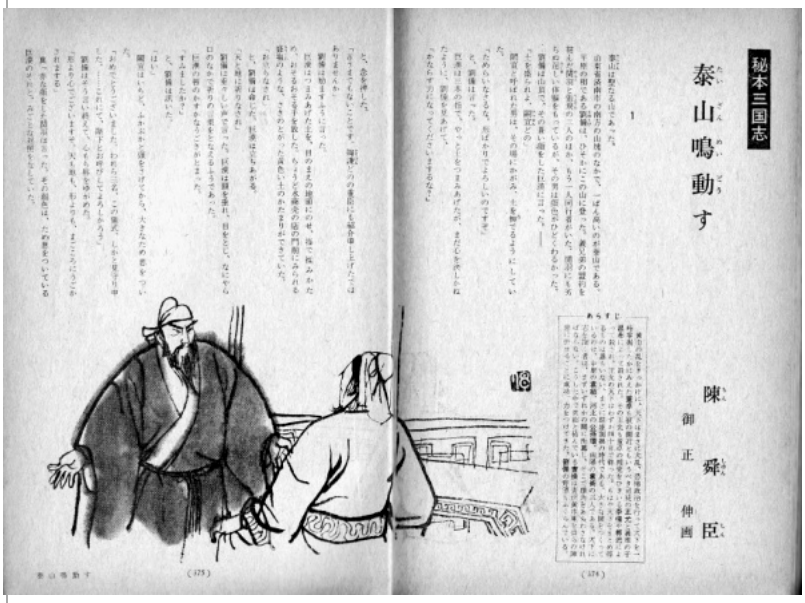
同号 目次



秘本三国志

挿画は御正伸(みしょうしん)。

「泰山鳴動す」掲載頁



掲載、最初のページ、聖なる山・泰山で、劉備は謀り、天帝崇拝教教主闕宣(けっせん)に、天下を統一し泰平をもたらした聖天子だけがとりおこなう資格をもつ「封禅(ほうぜん)」のまねごとをさせた。挿画は、右から、闕宣と関羽。

闕宣をおだててむほんをおこさせるのも、徐州の陶謙がその討伐で力を弱めるのを狙ったのだ。このあいだ、泰山まで行ったのは、そのためだったではないか。（13巻 p.314）

もう一つの挿画の場面です。

笮融(さくゆう)という大富豪が徐州に浮屠(ふと)(仏)寺を建て、その落成式が派手に行われた。その場に青い巾で頬かぶりをした、歌をうたいながら踊る一団が紛れ込んできた。そしてその一団は、突然なだれ込んできた兵卒たちに逮捕されてしまった。

「まぁ、怖しい…」
景妹(けいめい)は養父支英の膝にすがりついた。
「とりみだすでない。景妹も戦乱をいくたびも見たではないか」
支英がたしなめた。（13巻 p.318）